岡山県立博物館だより

52号
10月1日
1999

# 日本五ヶ伝名刀展

## ー平成11年度特別展の開催にあたってー

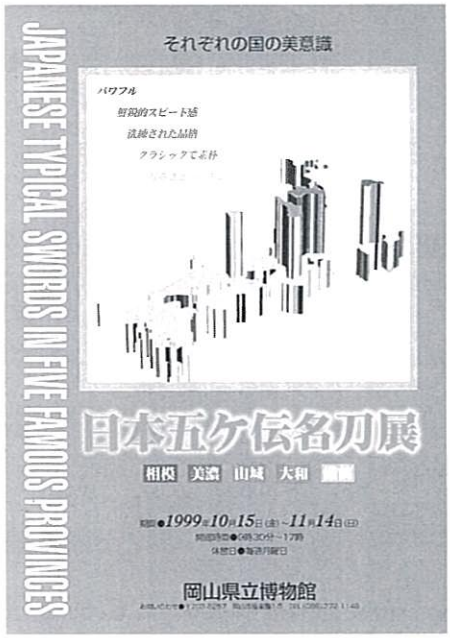
館長 加原耕作

岡山県立博物館では、平成11年度特別展「日本五ケ伝の名刀展」を10月15日（金）から11月14日（日）まで約１か月間にわたり開催することになりました。

古代の直刀にかわって、鎬と反りをもつ日本刀が制作されるようになったのは平安時代後期のことで、武士の誕生とほぼ同時期にあたります。武士の世となった鎌倉時代以後に制作された刀剣は夥しい数にのぼります。その制作の中心となったのは備前・山城・大和・相模・美濃の五か国で、それぞれ特色をもつ刀剣を世に送り出しました。これを五ケ伝と称していますが、この特別展では、東京国立博物館・京都国立博物館・熱田神宮・厳島神社・黒川古文化研究所・萬野美術館・吉備津神社をはじめ多くの所蔵者のご協力を得て、それぞれの代表的な名刀を展示いたします。

日本刀は武器として作られたものでありますが、それはまた鉄のもつ美を最大限に引き出した美術品でもあり、日本人は刀姿・地鉄・刃文などに優れた美を見いだし、愛玩してきました。また、刀剣は古くから日本人の精神生活とも深く関わり、神社のご神体として祀られたり、ご神宝として大切に保存されてきたものも少なくありません。一般の家庭でも魔よけのため死者の枕元に刀剣を置く風習は今も続いております。刀剣は武士の魂ともいわれ、江戸時代には将軍をはじめ諸大名は競って名刀を収集しました。こうしたことは世界に類をみないことであり、刀剣は日本の歴史や文化を知るうえで極めて貴重な資料でもあります。このような点にも想いを馳せながら、五ケ伝の名刀の数々をご高覧賜われば幸いであります。

終わりになりましたが、この特別展へのご出品を快くご承諾くださいました所蔵者の方々をはじめ、ご指導・ご協力を賜わりました皆様に心から御礼を申し上げます。



## 平成11年度特別展

# 「日本五ケ伝名刀展」

平成11年10月15日（金）～11月14日（日）

### 文化としての刀剣

刀剣を含め先人の英知の結晶である文化財や美術工芸品を、我々が理解するとき、その文化財単体にとらわれがちであるが、その文化財が生まれた必然性の理解を忘れてはならない。その理解こそが自分たちが拠って立っている現代を知ることにもなるからである。漂流の時代だと言われる現代にとってそのことはより重要性を持ってきている。

明治十年代、西洋化の嵐が吹き荒れた日本において、日本人は日本の文化を捨てようとしていた。明治十一年に来日し、東京大学で哲学の教鞭を取り、美術に強い関心を持っていた米国人フェノロサは、その時日本人よりも日本文化の素晴らしさを見抜き、大切にすることを訴え、大きな運動を起こした。

彼は美術や工芸を単に孤立、分離した美しき娯楽品や鑑賞物としてのみ考察してはならないと説いた。彼は美術や工芸は人類の文化生活における必需的生産物であり、社会生活の必然から生成、発展、衰退を繰り返す、生きた存在と見たのであった。こうして彼はすでに百二十年以上も前に美術工芸品を広範な人類文化史的観点、社会的関係に於いて把握しようとしたのである。

従って美術の歴史は、こうした歴史的創造力の産物であるとし、その作品のみにとらわれて、美術をうんぬんすることは、骨董蒐集家のすべきこととした。また「隆盛期によって之を分類するのが、社会学者のなすべきところ」と論じ、彼が骨董家的立場から美術を研究するのではなく、社会学者的眼光で、美術の本質、生成、発展過程を認識しようとするものであることを明治初年に明言しているが、果たしてその時の思いは百二十年を経た今日、日本に定着しているのであろうか。

フェノロサはまず第一に、創造力としての美術や工芸品を学術的に解釈しようとするとき、いかなる時代でも美術の異質性ないしは時代的共通性の認識から出発した。そういう意味で、古代の律令制が崩れ、中世が開始する時というのは、武士が登場し、それを映してあらゆる面で新しい展開を見せ、文化的に重要な意味を持っているはずである。

日本文化の真髄であるともいわれ、それ自体長い歴史を持つ刀剣の場合も、古代末中世初頭に急発展を遂げることになる。刀剣はこの転換期という社会的背景の中で、時代を画する大変革をとげ、いわゆる鎬造、湾刀という「日本刀」として誕生した。大激変の時、新しく生まれるものには力がある。多少のタイムラグはあっても、その土地その土地で新しく生まれるものにも力がある。結果、刀剣として後々の規範となるような大きな特徴をこの時備えることになった。刀剣研究、鑑賞の上でこの時代をやりすごすことは出来ない。

しかも、時代と文化の創造や特徴をより的確に表すためには地域的な面を加味する必要があるが、そのためには日本刀の場合何が必要であろうか。今それを見つめ直す必要があるのではなかろうか。今回は刀剣を今までとはほんの少し見方を変えて見て貰えたらと思っている。

### 地域に発達した美意識と刀

日本の刀剣は世界で最も美しく鍛えられた鉄の最高の工芸品であることはもちろん、日本の文化のエッセンスが込められたものであることは疑う余地がないけれど、決して分かりやすい文化財とは言えない。

本質把握において、分かりにくい場合とか、複雑であったり糸がもつれてこんがらがった場合に、ものごとを把握し、解明しようとする時、「まず経緯を正す」「経緯を述べる」という言葉があるように、縦（経）糸と横（緯）糸の筋道をもって体系的に捉えなければならない。日本の刀剣を理解するにも解き方の道順がある。

昭和五十五年、縄文晩期の福岡県石崎曲田遺跡から日本最古の鉄製品（鉄斧）が発見された。鉄器が導入されて以来ほぼ二千年、日本人は刀剣には色々な思いや使命、矛盾解決への努力とか、美意識をほぼ二千年間縦の流れの中に託されてきたのである。そのため逆に刀剣とその歴史から、日本人の思いや美意識といったものを呼び出すことも出来るはずである。

時代別変遷から見た刀剣分類が、いわゆる「経線」で、そこには古代の刀剣として〈上古刀〉があり、平安末期から室町末期のいわゆる中世の刀剣としては〈古刀〉がある。慶長から江戸末期までという近世の刀剣は〈新刀〉と呼ぶ。明治以降の近代の刀剣を〈新々刀〉と呼んできた。

古代末から中世初頭に登場した〈古刀〉と呼ばれる刀剣こそが以後一千年の刀剣の規範となり続けるほど素晴らしいものであった。同時代の甲冑や、陶磁器、その他の工芸品を例にとっても分かるようにこの時代の工芸は、力強さなどある種の共通したものを持っており、日本全体の時代や人々のエネルギーに満ち溢れていたことを証明している。

これに対して「緯線」で例えられるものが、地理的な面、すなわち地域的特質の分類である。中世古刀の制作地は、山城、大和の畿内を初めとして、備前、備中、相模、美濃、伯耆、遠くは陸奥、九州の地に及んでいる。武家政権の登場でそれらが少しずつ集約されてきて、その中でもほぼ比較しやすい接近した時代に全国で技術も高まり、生産力も大きく有名になっていき、指導的役割を果たした産地が「相模」「美濃」「山城」「大和」「備前」の五国であり、その伝法を含めて五ケ伝ということになる。

五ケ伝は、中世というその時代において、刀剣がその場所で集約的に一生懸命作られた場所であり、一帯の人々に支持されたから新しい時代にそこに力強く存在し得たのであり、やはりその時代のその地域の文化に後押しされて輩出してきたはずである。つまり、五ケ伝の刀剣を生み出したその地域の文化や歴史を背景とした美意識がそれぞれの地域の刀剣に反映されていないはずはないのである。

文化としてみた場合、どこの国の刀剣が一番素晴らしいかではなく、どういった自然・社会環境地域に如何なる刀剣が作られたかということが重要なのである。今と違って、交通や情報の伝播のスピードはゆっくりとしていたに違いない。であれば余計に当時は、地方地方で、そこの人々はその文化や美意識を最上と思っていたに違いないのである。今回の展観のねらいはまさにそこにある。相模には相模の美があり、美濃には美濃の美しさを映した美があり、山城には山城のとらえる美が、大和には大和の歴史からくる美が、備前には備前のバランスの美の基準があったに違いない。文化としての刀剣とはそれをいうのである。

## 五ケ伝のキーワード

文化の多様性とか、地方の時代といわれる中で忘れてはならないことがある。大切なことは、その地方特有の象徴的バックボーンを持って、それがあらゆる文化や、文化財、思想に映しているかどうかということである。混沌の時代と言われる今日、地方の豊かさとは何かが問われている。どの地方も素晴らしいという許容度と、自己の文化に対する自覚と自信を忘れてはならないということである。文化は一朝一夕では出来ない故に大切なのであり、文化を失うことは人間が記憶を失うことに等しい。

ところで今日五ケ伝を象徴的にとらえるとするならば、次のようなキーワードに集約されるかも知れない。

【相模】　パワフル
【美濃】　鮮鋭的スピード感
【山城】　洗練された品格
【大和】　クラシックで素朴
【備前】　力強さとハーモニー

こう見るとそれぞれが素晴らしいことではないか。

そうして、縦糸で日本の刀剣を見た場合、平安時代後期以降、慶長頃までのいわゆる古刀期には、次の時代の新刀に比較したときはるかに国ごとの特色がより鮮明に現れているのである。横糸で見た日本刀の代表的な生産地の五ケ伝では時代の差こそあれ、相模、美濃、山城、大和、備前のそれぞれの国で生まれた刀剣が地域特異的な作風（技術的には伝法）をもって発達し、洗練され、全国にその名刀ぶりを知らしめた。ひょっとすると日本の潜在的なあらゆる美意識も五ケ伝に象徴されているかも知れない。

しかしながら、備前の地においては、その生産量から見ても、名声からみても圧倒的力を持っていたがために、他の地域の刀剣を文化として冷静に比較してみるチャンスが今まで与えられ難かった。そこで刀剣文化に許容幅をもって見て欲しいと思って企画したのが「日本五ケ伝名刀展」である。日本刀の古刀期、それもほぼ日本刀の黄金時代である鎌倉時代を中心に比較の設定をしてみた。

日本にサムライがいなくなって久しい。代わって日本をリードした軍人も消えた。それにとって代わって戦後日本を動かしたとみられる官僚も、今我々の目の前で炉心溶融シンドロームを起こしている。一体この先日本を律するものとは何であるべきなのか。武士道の象徴である力強い刀剣文化の原点に戻ってみると、今の時代に向けられたメッセージ、ヒントを拾い起こすことが出来る気がする。

## 主な展示資料(予定)

【相州】
重文　短刀　銘　新藤五国光
鎌倉時代中期　個人蔵
重文　刀　無銘　行光
鎌倉時代末期　黒川古文化研究所
短刀　無銘　正宗(多賀正宗)
〈本阿弥家多賀高忠所持〉
鎌倉時代末期　個人蔵
国宝　刀　無銘　正宗(名物中務正宗)
鎌倉時代末期　個人蔵
重刀　刀　貞宗
鎌倉時代末期　萬野美術館蔵

【美濃】
重文　太刀　銘　兼氏
南北朝時代　個人蔵
刀　銘　兼定　〈家康所持〉
室町時代　大阪市立博物館

【山城】
太刀　銘　国永
鎌倉時代初期　個人蔵
重文　太刀　銘　吉家　〈島津家伝来〉
鎌倉時代初期　京都国立博物館
太刀　銘　国安
鎌倉時代初期　東京国立博物館
重文　太刀　銘　国友
鎌倉時代初期　熱田神宮
重文　太刀　銘　菊御作　〈山城〉
鎌倉時代初期　京都国立博物館
重美　短刀　銘　吉光
鎌倉時代中期　黒川古文化研究所
短刀　銘　吉光(名物藤四郎吉光)
〈池田光政所持〉
鎌倉時代中期　東京国立博物館
国宝　太刀　銘　則国〈鳥取池田家伝来〉
鎌倉時代中期　京都国立博物館
重文　短刀　銘　国光(名物塩河来)
鎌倉時代末期　個人蔵
重美　短刀　銘　国光
鎌倉時代末期　個人蔵
太刀　銘　長谷部国信〈閑谷神社伝来〉
南北朝時代　東京国立博物館

【大和】
重美　太刀　銘　千手院
鎌倉時代　東京国立博物館
重文　太刀　銘　大和則長
鎌倉時代　泉涌寺
太刀　銘　包永　〈西郷従道所持〉
鎌倉時代　東京国立博物館
刀　無銘　当麻〈小笠原秀政所持〉
鎌倉時代　個人蔵

【備前】
国宝　太刀　銘　友成　〈平宗盛奉納〉
平安時代末期　厳島神社
重文　太刀　銘　吉包
鎌倉時代初期　東京国立博物館
重文　太刀　銘　則宗〈土浦藩主土屋家伝来〉
鎌倉時代初期　岡山県立博物館
国宝　太刀　無銘一文字(山鳥毛)
〈上杉家伝来〉
鎌倉時代中期　個人蔵
国宝　太刀　銘　吉房(岡田切)
〈織田信雄所持〉
鎌倉時代中期　東京国立博物館
国宝　太刀　銘　長光(大般若)〈家康所持〉
鎌倉時代中期　東京国立博物館
重美　太刀　銘　吉平　〈池田家伝来〉
鎌倉時代中期　個人蔵
太刀　銘　長義
南北朝時代　東京国立博物館
県文　大太刀　銘　法光　〈薬師寺久用奉納〉
室町時代　吉備津神社

【その他】
大太刀　無銘　〈笠原與藤次奉納〉
桃山時代　吉備津神社
刀　無銘　古三原〈閑谷神社伝来〉
(金象眼銘　松平武蔵守利隆用之)
鎌倉末期～南北朝　東京国立博物館

| | | |
|---|---|---|
| 国宝 | 6 | |
| 重要文化財 | 10 | |
| 重要美術品 | 4 | |
| 特別重要刀剣 | 1 | |
| 県指定重要文化財 | 2等 | 合計36口 |

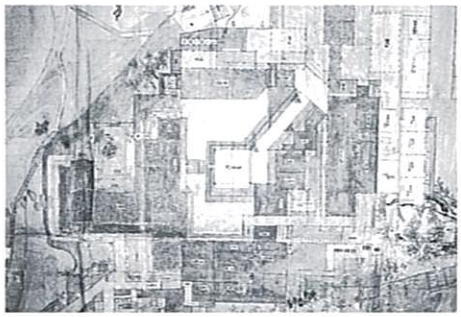
## 今後の展覧会について

# 特別展　岡山城と後楽園

平成12年2月4日（金）～3月5日（日）

岡山県立博物館では、平成12年に築庭300年を迎える後楽園の記念行事に協賛して、後楽園をテーマにした展覧会を開催します。

岡山城と後楽園の築造とその変遷、岡山城歴代の城主、全国の主な大名庭園などを紹介する予定です。記念講演会も予定しておりますので、ぜひお越しください。



後楽園絵図（部分）後楽園事務所蔵

岡山県立博物館だより　No.52
発行日　平成11年10月1日
発行者　岡山県立博物館
館長　加原　耕作
岡山市後楽園1－5
☎(086)272－1149